



腫瘍型の大腸がん

陥凹型の大腸がん

# からだを読み解く

九大病院別府病院の研究から

-11-

がんは細胞分裂の際に誤った遺伝子の情報をコピーして蓄積し、まずは「腫瘍」となり、次にがん化します。大腸がんは、加齢や大腸粘膜で発がんのリスクが高い細胞で、分裂の際に

発生した遺伝子の傷が少し

も直接発育して腫瘍を形成しない「陥凹型大腸がん」

（粘膜下層まで浸潤した大腸がんの3割は陥凹型）

（悪性化）して、さらに大

きくなるという「多段階発がん説」が大きな要因とし

## 腫瘍をつくらない小さな大腸がん

外科講師 江口 英利

も高いことが報告されています。陥凹型は「しこりをつくらず、小さいため発見が難いですが、高頻度に存在する悪性度の高い病変」といえます。

九州大学病院別府病院は、確実に早期発見する方法を確立しようと、陥凹型

## 正常粘膜から直接発育



江口英利講師

の存在が提唱され、欧米でも重要視されています。進行大腸がんも最初は陥凹型なのではないかと考える研

究者もいる。病変の大きさとは別に陥凹型の方が腫瘍形成型に比

ます。陥凹型大腸がんの特徴は①腫瘍を形成しな

いので早期発見が難しい②しかし近年、正常粘膜から直接発育して腫瘍を形成（粘膜下層まで浸潤した大腸がんの3割は陥凹型）③

病変は小さいが非常に強い浸潤傾向にあるなど悪性度が高い一の三つが挙げられます。

昭和大学横浜市北部病院消化器センターの工藤進英教授らと共同で研究に取り組んでいます。

発症や進展のメカニズムについて、DNAやRNAといった遺伝子レベルでの研究を進めしており、簡易かつ早く特定できるマ

ークーの開発をしていま